



第45回「小さな親切」作文コンクール【内閣総理大臣賞】を紹介します。

「みんなが笑顔になりますように」

千葉県船橋市立三山東小学校 4年島田侑依芽



今年の夏休みは短く、おじいちゃん、おばあちゃんの家にお泊りに行けないので、私はペン立てを作って届けてあげようと思い、材料をそろえに、近くのスーパーへ買い物に行ったときのできごとです。

ふだんであればお母さんといっしょなのですが、その日はお母さんが仕事だったので、一人で欲しいものをメモにとってスーパーへ行きました。考えてみると、初めての一人での買い物で、ワクワクしながらも、少しきんちょうしていました。とても暑い日だったので、マスクの中は汗でベトベトになっていました。

スーパーの入り口に着くと、店内から流れるエアコンのすずしい風が気持ち良くて、マスクをはずして汗をふきたくなりましたが、入口のドアの横に、『店内にはマスクを着けてお入りください』と貼り紙がされていたので、私はマスクをはずすのをがまんしました。

お店に入ろうとしたとき、腰の曲がったおじいさんが困った顔をして、貼り紙の横に立っているのに気づきました。店員さんに、「マスクをしてくださいね。」と声をかけられていました。おじいさんは、首をかしげながら、何か店員さんに伝えようとしているようですが、上手く伝わらなく、耳も遠いようで、店員さんの声はどんどん大きくなっていきました。

まわりを通る人がその様子を見て、「マスクをしないなんて、常識ないわね。」と話しながらお店に入っていました。私はおじいさんが、かわいそうだと思います。一人での買い物にワクワクしていた気持ちが、悲しい思いに変わったままお店に入りました。

買い物をすませてお店を出ようとしたとき、私はおどろきました。おじいさんが、まだお店に入れずに立っていたからです。その場に立ち止まり、自分に何かできないだろうかとしばらく考えました。

「あっ。」思わず声に出してしまいました。私は、いつもポーチに予備のマスクをもう一枚入れていることを思い出しました。これをあげれば、おじいさんはお店に入ることができると思いました。「少し小さいですが、このマスクを使ってください。」と、思い切って声をかけてみました。私の声がしっかりとおじいさんに伝わっているか心配だったけれど、おじいさんは笑顔で私に「ありがとう。」と言って、マスクを着けてくれました。うれしくて温かい気持ちになりました。私は、おじいさんがお店に入っていくのを見届けてから家に帰りました。

昨年までの私は、困っている人を見かけても、一人で声をかける勇気を出せなかったと思います。しかし、今は自分から手助けをすることができ、一步成長できたと思います。新型ウィルス感染症によって、私たちの生活は大きく変わりました。こんなときこそ、みんなが笑顔で思いやりを持ち、支え合えればすてきだと思います。今でもおじいさんの「ありがとう。」の言葉は、私の心の中に残っています。

読む者が、笑顔になれるすてきな作文ですね。作者の島田さんの優しい気持ちが伝わってきます。防府市にもこの作文を書いた島田さんのような優しい子どもはたくさんいることでしょう。

防府市は、「小さな親切実践都市」として宣言しています。街いっばいに優しさが溢れた防府市になって欲しいものですね。

(文 責=青少年育成センター指導員 藤村 )